

# 分析化学研究室生誕 100 周年の佳節



西 澤 精 一

平成 30 年（2018）の今年、実は、分析化学に携わる私たちにとって大切な節目となる年です。分析化学を専門とする日本で最初の研究室が、勅令により東北帝国大学理科大学化学科に設置されたのは、今から 100 年前の大正 7 年（1918）のことで、現在、筆者が担当している分析化学研究室です。東大ではなく、京大でもなく、東北大に最初に設置された事実は大変興味深いのですが、兎に角、今年は日本での分析化学研究室生誕 100 年にあたる記念すべき年なのです。

創立当初、分析化学研究室は化学第四講座と呼ばれており、初代教授は京都帝国大学を卒業された小林松助先生です。ちなみに、化学第一講座（現在の無機化学研究室）は、幻の元素“ニッポニウム”を発見された小川正孝先生、化学第二講座（有機化学第一研究室）は、日本の有機化学の創始者として知られる真島利行先生、化学第三講座（理論化学研究室）は、日本における最初の本格的物理化学の教科書「化学本論」を著した片山正夫先生が担当されていました。「東北大学百年史 五部局史 二」によると、小林先生は京大を卒業される際、「成績抜群の故をもって恩賜の銀時計を拝受」されたそうで、卒業翌年の明治 44 年（1911）に東北帝国大学に助教授として着任、化学科の設置に尽力されました。教授に昇任される前の 3 年半程の間アメリカに留学され、「ハーバード大学のリチャーズ教授（1914 年 アメリカ初のノーベル化学賞受賞）のもとでハロゲンや銀の原子量を化学的に決定する研究に従事し、その原子量の値は第二次世界大戦終了後までも小林-リチャーズの値として利用された」とのこと。小林先生は、研究はもとより教育もとても熱心だったそうで、「多くの試薬や器具を教卓に並べて鮮やかな手際で講義実験を行い、…明快な講義は多くの学生を引きつけた」とあります。余談になりますが、日本初の女子大生となる黒田チカ先生、丹下ウメ先生が東北大化学科に入学されたのが大正 2 年（1913）、もしかすると小林先生の講義を受けられたのかも知れません。また、ノーベル物理学賞受賞直後のアインシュタイン博士が東北大に来学されたのは大正 11 年（1922）ですので、きっと小林先生ともお話をされたはずですよ。

その後、分析化学研究室は、箱守新一郎先生（昭和 23 年（1948）～）、岡 好良先生（昭和 34 年～）、鈴木信男先生（昭和 45 年～）、寺前紀夫先生（平成 5 年（1993）～平成 25 年）と引き継がれてきました。分析化学会が設立されたのが昭和 27 年です。分析化学の発展に貢献された多くの先生方・先輩方が積み重ねてこられた 100 年の歴史をたどらせていただくとき、改めてそのご尽力に最大限の敬意を表すとともに、心よりの感謝の気持ちを申し上げたい、と思います。そして、次の 100 年に継いでいくのは、いまの私たちの使命です。

今年で第 67 回を数える分析化学会年会は、奇しくも分析化学研究室発祥の東北大学にて開催されます。会場はもとより、東北の美味しいお酒と肴をお供にして、大いに私たちの意気込みを語り合える機会になることを期待しています！

〔Seiichi NISHIZAWA, 東北大学大学院理学研究科, 日本分析化学会東北支部副支部長〕